

「意図的」なのか、「無意識」なのか!?

渡辺えり

まるでバランスの取れない綱渡りをするようにくるくる回りながら登場してくる少女たちに、男性社会、現代日本の問題点が凝縮されていると感じて興奮した村上慎太郎さんの『ハイアガール』を推したいと思った。まさに「這い上がる」。落ちてしまった高い塔から必死で這い上がる女性たちの話だと思った。塔は格差の象徴でもあり屹立した男根の象徴でもあろうと感じた。誤読であろうと、自分の思いを言葉では伝えられない不器用な人たちの心に対する優しい眼差しを感じた作品だった。

上田誠さんは上手い。台詞も面白い。しかし、人間とアンドロイドの格差のない、バーチャルな世界とリアルの境の無くなってしまった近未来の世界がナチュラルに溶け込んでいる、このユーモア溢れる愉快的戯曲『来てけつかるべき新世界』に社会批判が感じられないのはどうしてなんだろう？そこが恐ろしいと感じてしまった。私の両親は今、老人ホームにいる。先日母が骨折してしまい慌てて山形に帰郷した時に起き上がれない母が下痢をして、幾度かのおしめ替えに、娘の私でさえ往生しているのに若い介護士たちが真剣に幾度も母のお尻に付着した便を拭き取り、おしめを替えてくれた。何とも申し訳なく、ロボットにやって欲しい、とってしまった私だった。ミヒャエル・エンデの『自由の牢獄』や『ブレードランナー』の批判精神をどうしても軸にしてしまう私があった。それでもみんなが推したら大賞もやぶさかではないとも思っていた。その時は私の読み込みが浅いのだと思おうとした。

田辺剛さんのいつもの饒舌な理屈っぽさが好きだった私は、今回の『微熱ガーデン』の映像的な少ない言葉と、格差社会の底辺の貧困の連鎖を描く流行っぽい作風に転じた意図が図りかねた。

でも独特の捻じれを感じる。次作に期待したい。

植松厚太郎さんの戯曲は私の読み込みが浅く、その個性や豊かさを理解することが難しかった。

岡部尚子さんは好きな作家だが、今回の『ここも誰かの旅先』は書こうとする強い意思の見えずらい作品だった。覚悟を決めて人情ものにするか？あくまでファンタジーの多重構造を意識するのか？破綻を恐れず思い切って書いて欲しいと思った。

田中遊さんの本屋さんの話『私と本屋の嘘』は出だしが衝撃的で面白く期待したが、前作『夜の素』の方がイメージが鋭く新鮮だった。本の世界をどうとらえるのか？本屋という職業をどうとらえるのか？

アマゾンに食われている本屋の世界だからこそ、もっとロマン溢れる作品にするか？社会批判を鋭くするか？難しいが、本の世界を演劇の世界とダブらせて欲しかった気がしている。

棚瀬美幸さんの作品も前から期待している。今回の『これっぽちの。』は、日常の風景と非日常の空間にアンバランスな女性心理を掛け合わせようとした工夫は理解できるが、意図的に不条理にしたいのか？どう捉えられても良いように自然に投げ出したいのか？掴みにくい点が多かった。

今回大賞となった山崎彬さんの作品『メロメロたち』に関しては九鬼葉子さんがまとめて下さった選考経過を読んでいただきたいが、好きな部分と本当に嫌な部分の混在した不思議な作品である。わざとぐじゃぐじゃにして煙に巻きたい、役者と兼ねた作家特有の照れが入っている。マゾヒズムとナルシズムが共存する作品だ。そこが嫌で好きな部分かもしれない。出演している役者全員に見せ場を作り、台詞を宛書きするという苦勞が分かるから応援したい部分と批判したい部分が出てくる。しかし、上演するための戯曲として破綻を恐れず、作品を犠牲にしても役者を引き立たせ、一回性の幻に駆ける演劇魂を感じる。こういう作品を応援したくなる心情を大切にしたいと私は思う。

しかし、しかしである。私は女性としてやはり男性作家たちの女性蔑視的な表現には閉口する。山崎さんの「おっぱいだけ好き」な男性の設定に女性蔑視批判の意図があるなら理解したいが、何も考えていないなら、今こそ考えて貰いたい。

先日、政治家がアフリカに援助し続けている友人のパーティの挨拶で「あんな黒いのどこが好きなのか？」と発言して問題になったが、自然に口から出た差別意識が問題なのである。悪気がないのが問題なのである。このエピソードを意図的に使うのは風刺だが、無意識なら罪は重い。山崎さんが無意識なのか？風刺として書いたのか？この問題は次回語ろうと思う。